

エミール・ゾラと歴史

Emile Zola and his time

文化的変化の速度は、生物学的変化のそれより
何千倍も速い（J・S・ハックスリー）
『進化と精神』

大原知子
Tomoko Ohhara

ドレフュス事件のゾラ

1908年6月4日、作家エミール・ゾラの遺骨がパンテオン寺院の廟に合祀された時、列席した首相、クレマンソーは次のような式辞を述べる。「最も強力な王たちに逆らった人間たちはいた。だが皆が“肯り”を強要する時、敢えて頭をもたげ“否”というために群集に逆らった人間は稀であった」¹⁾。ゾラが、何者かによって自宅の暖炉を塞がれ、窒息死してから6年、ここでクレマンソーが指している“群集”とは19世紀末、フランスを真二つに分断したドレフュス事件の背景を作り出していた人々である。「真二つ」とは言ってもドレフュス擁護派にとって「事件」は同等な力から出発したものではない。

「事件」を巡る筆禍事件で、1898年2月、いわゆるゾラ裁判が始まった時、セヌ＝エ＝オーズ県重罪裁判所には群集が押し寄せ、裁判所は「ゾラに死刑を」「ドレフュスに死刑を」「軍隊万歳」という怒号に埋まり、ゾラは裏口から退出せざるを得なかった。群集はその後、ゾラの住居まで押し寄せ、投石にまで及んでいる。また冒頭のこのパンテオンでの儀式的時点においても、外ではモーリス・バレスやレオン・ドーデに扇動されたフランス祖国同盟²⁾の人々が騒ぎ立て、ドレフュスはナショナリストのジャーナリストからの発砲を受け、肩を負傷している。

ドレフュス事件とは、1894年にフランス陸軍のユダヤ系将校アルフレッド・ドレフュスが、情報部の入手した手紙の筆跡が似ているとの理由で、ドイツのスパイ容疑で捕らえられ、傍聴禁止の軍事裁判で有罪宣告を受け、その逮捕自体が闇に葬られかねなかった事態から始まった。この間、ゾラの、共和国大統領への公開状、あの有名な「私は糾弾する」がクレマンソーのオロール紙に載る1898年までの4年間、事を極秘にしたい政府、参謀本部の思惑にも係わらず、新聞界はこぞってドレフュスのことを書き争っていた。とりわけ発行部数の多いラ・リーブル・パロール紙、オトリテ紙、ル・ジュールナル紙、ル・タン紙など、もともとフランスにお

けるユダヤ人の進出を望まない右派の新聞があれこれとドレフュスの“罪”を書きたて、その“罪”をユダヤ人と結びつけ、“士官学校のユダヤ人将校”のリストまで掲載した新聞もあった。ゾラなどの無罪説を掲載していたル・フィガロ紙も反ドレフュス派の読者からのプレッシャーに折れ、1897年12月には編集責任者が交代している。従って、この“群集”というクレマンソーの言葉は反ドレフュス派がいかに多かったか、ということを実に示していると言えよう。ちなみに当時の新聞の発行部数を挙げれば、ドリュモンのラ・リーブル・パロール紙が50万部、頑迷な反ドレフュス派のル・ブティ・ジュルナル紙が150万部、カトリックのラ・クロワ紙が7万部、一方ドレフュス擁護派のル・フィガロ紙が7万5千部、オロール紙が20万部であり、ドレフュス派の新聞は10%に過ぎなかった³⁾ことになる。しかもそれらは全国紙ではなく、おしなべてパリの新聞だった。

ドレフュス派の運動とはドレフュスが罪か無実かという単純な勝ち負けを決めるような大衆レベルの土台から始まったわけではない。ドレフュスが“終身流刑”となり南米ギアナのサリ列島（悪魔島）に送られてから9ヶ月後、妻リュシーが議会で提出した再審要求の請願書は“根拠薄弱”で却下されている。一方、ドレフュス逮捕から5ヶ月後、新たに陸軍情報部に就任した中佐（ピカール）がこの逮捕に疑問を持ち、数々の証拠をもってゴンズ將軍に再審を説くが、逆にチュニジアに左遷される始末だった。上院副議長のシュレール＝ケストネルもビヨ陸軍大臣やメリーヌ首相、フォール大統領にまで話をもっていくが、聞き入れられなかった。大体、発生時から曖昧で（84年の軍法会議では、釈放と決定されかけた時、陸軍のある代表が秘密書類を携えてやって来、それでドレフュスの罪が決ったという。そして件の書類はドレフュスにも弁護士のドゥマンジュにも示されることはなかった⁴⁾、陸軍参謀本部は勿論、4年後の98年に入ってさえメリーヌ首相によって「事件」は存在しない”と言わしめたこの冤罪事件は、上記のような時流の中で、従ってドレフュスの妻や兄のマチューらの手探りの再審要請運動や、家族の友人でジャーナリストのベルナル・ラザール、陸軍のピカール中佐のような2、3の正義感に溢れたほんの一握りの人々の異議から始められたのである。より早期にドレフュスの無罪を確信し、裁判のやり直しのため手を尽くしていたシュレール＝ケストネルさえ、ラ・リーブル・パロール紙、ラ・パトリ紙らにドイツ軍の手先、あるいは狂人扱いされ、若者たちの罵声を浴びる始末だった。

では社会のこのような少数派の中で、また普仏戦争の敗北でナポレオン3世の第2帝政が崩壊し、パリ・コンミュンの動乱を経て、その共和制の中に王党派の生き残り、マクマホン元帥大統領を追い出してフランス共和国が、やっと共和主義者たち自らの手になる共和国の統治を始めて（1879年）⁵⁾からわすか十余年の歳月しかたっていない時期に、そして常にビスマルク率いるドイツとの戦争の危機が存在し両国間にし烈なスパイ合戦が繰り広げられ、それこそ軍隊を“奉って”挙国一致の政策が声高に叫ばれていた時、一体どのようにして、ドレフュス擁護派は絶対多数の群集を巻き込んだ反ドレフュス派のプロパガンダ、“軍の威信、国や軍隊という最上位の社会制度の価値を落とす”と恐れた運動を展開し、裁判やり直しにまでこぎつけることができたのであろうか？ それは『知識人の誕生』⁶⁾でクリストフ・シャルルの語るフランス史上初めてのある階層の出現であった。すなわち“知識人”である。

ドレフュス事件時代のフランスを扱ったクリストフ・シャルルのこの著作の結論を先に述べると、ドレフュス事件への大学人の介入は帝政以来、権力の言うがままになっていた団体を見ることに慣れていた同時代人を最も驚かせるものであった。「だが、その数や象徴的な機能を通して、ことさら彼らが要求したのは18世紀以来、伝統的に文人たち (hommes des lettres) が占めていた場所を第一に占めることであった⁷⁾」。一方、これら大学人の側から見れば、ゾラなどのような作家たちは「知的な運動に関して、昔のモデルは現代では適応不可能だということに気が付いた。現在では、文学や知的な場で主流となる位置を勝ち取るために必要な威厳は、学問が、従ってその具象者、学者が代表している新しい正統性から汲み取られなければならない⁸⁾」。

ところでシャルルは、この「知識人」(Les intellectuels)という言葉自体が、ドレフュス擁護派を非難するモーリス・バレスの蔑視用語から由来する新語であることを指摘している。かつての“芸術家”(l'artiste)とか“詩人”(le poète)とか呼ばれた感性をもつ若い人々が、産業革命以後の政府の教育推進策で、高学歴を持ちながら仕事にあぶれ、「知識人」となり、当時大発展を見せていたジャーナリズムの世界に活路を見出そうと運動に群がったというのである。彼らは事件の推移の中でドレフュス派と反ドレフュス派となり、学者、貴族のサロンまでを巻き込んだ大論争の浸透役を担ってゆくことになる。政府が議会で、陸軍の決定を「既判事項」として再審を満場一致で拒んだ時、「正義の永続権」を要求して運動を展開してゆき、ドレフュス逮捕から10年の歳月を得てやっと、再審にこぎつけたのはドレフュス派である。彼らはゾラの「私は糾弾する」の記事(1898年1月13日)が掲載された翌日、再審請願書「知識人104人宣言」を出し、ゾラ裁判の間、彼の「前進する真実」を支援するため、8千人の加盟者をもって「市民人権同盟」を設立している。

だが、実際、アルフレッド・ドレフュスとはいかなる人間だったのであろうか。この問いはある範囲では反ドレフュス派の感情を理解するのに必要だと思われる。そしてこの再審決定の頃より、ドレフュス派にあっても「事件」は「“ドレフュス抜き”のドレフュス事件」といわれるようになった。決定的だったのは、ドレフュスが再審で再び有罪となり、同時に大統領の“恩赦”という形で釈放された時、ドレフュスが争うことをやめ、この恩赦を受け入れたことだった。このドレフュスの行動に失望したのはクレマンソーだけではない。ベルナール・ラザールもシャルル・ペギーも批判している。

ドレフュスへの失望は彼の性格的な“弱さ”以前に、まずその“外観”から、彼が再審によって皆の前に現れた時に始まった。皆は4年間の悪魔島での苛酷な生活に耐え、レンヌの法廷に現れて正義のために戦おうとしている“英雄”をイメージしていたのだ。この時の姿は後述するとして、この大衆に好感を与えない彼の印象を伝えるものは、もっと以前に遡ることができる。モーリス・バレスとともに、後の反ドレフュス派の中心になるレオン・ドーデはドレフュスの位階剥奪式を見た時の印象を次のように語る。「誰だってあのドレフュスの、頭を挙げて、軍隊式に歩く位階剥奪の時の様子を見たら、群集たちと同じく反発しただろう。あの人種というのは対面を汚されるということがどんなものか知らないのだ。竜騎兵隊のブクサン曹長がドレフュスの軍帽や袖の金モール、軍服の金ボタンを剥ぎとっているというのに、目を大きく見開き、指をズボンの縫い目に当ててドレフュスは身じろぎもしなかった。何と下劣なのだ。彼

はくり返し、こう言っていた。『兵士たちよ！ 無実のものが地位を剥奪されている！ 私は無実だ……フランス万歳！ 軍隊万歳！ 妻や子供たちの命にかけて誓う、私は無実だ！』彼の言葉など太鼓の音が消してしまえばよかったのだ⁹⁾。この話を聞いた時の、ゾラに生じた感情は次のようなものだった。「私は位階剥奪の公開儀式は見なかった。だがその時の様子を聞いた時、ヒューマン的なところから私は、“無実を叫んでいる一人の人間に全員がかかっていくということに、そして群衆の狂暴さというもの”に動揺を感じた¹⁰⁾」。

だが、ドレフュスの絶望の、このような無防備で不器用な表現は、レオン・ドーデに見られたのと同様、ある種の人々にはサディズムを引き起こすだろう。この剥奪式を見物し、ゾラ同様“困惑”を感じた作家で議員のモーリス・バレスの感情は、ゾラとは反対の方に向かう。事件が噂になった頃、ゾラやアルフォンス・ドーデと夕食を取りながらバレスは語る。「私は偉大さに欠けた人物の無実情熱をかけることはできない¹¹⁾」と。このような“人格”を基準にした一種の“人権差別”の考えは、時の流れの中で当然バレスをして反ドレフュス派の中心に据え置き、その行方は1902年に出版された彼の『ナショナリズムの情景と教理』の中で、「例え、ドレフュスが無罪だったとしても、ドレフュス擁護派の人間たちは、国を分断し、軍隊を無力たらしめたことで罪がある。正義とは同じ人種の内部にしか存在しないものだ。ドレフュスは違う人種を代表している¹²⁾」と、人種差別にまで至らしめる。そして、“もしやりがいのある人物だったら”というバレスの考えは、ゾラの勇気を認めながらも反ドレフュス派に自らの身の置き場所を決めて以来、まるで個人的な恨み事でもあるかの如く、感情的な攻撃のパターンでゾラのイメージ・ダウンを狙った記事を書きまくる行動を取らせるのだ。

同じ頃、シュレール＝ケストネルの行動に好意を持ち（「最も下劣な脅しと侮辱の中にあって、あくまでも冷静なあなたの態度に、私は賞嘆の気持ちにかられます¹³⁾」）、ドレフュス擁護の記事を小冊子やル・フィガロ紙に書き始めたゾラに対し、レオンの父、アルフォンスも言う。「（ドレフュス）の件についてこれ以上書いてはいけません。もう書くべきではありませんよ。なぜってそれは国に禍を引き起こすからです¹⁴⁾」と。

ドレフュスの人間について、それではゾラ自身の印象はどうであろう？ 再審が決定され、レンヌの裁判所で法廷に立ったドレフュスについて、ゾラは以下のようなメモをとっている。

「彼自身、非常に強い愛国心（ナショナリズム？）に浸っている。償ってもらいたいと欲している。自分の民族を赦してもらいたいと望んでいる。感じの悪い小さな顔。外からの資質には恵まれていない。声は弱く、多少しゃがれている。虚弱な様子。体は強ばっていて、それほど威厳がない。義務感いっぱいの大変良い将校である。多少弱々しく、不安感のあるユダヤ人だけに極端なまでに規律正しい。上司から悪い点を貰わないよう、すべて規則に持ち込み、そこに馬鹿正直なくらい厳密に執着している。将校であることを誇りにしている¹⁵⁾」。

ナショナリスト、軍隊への絶対忠誠の態度と信頼、レンヌ裁判のドレフュスの印象は従って、ドレフュス擁護の一部の人々を「もし、このドレフュスがドレフュス事件に介入するとしたら、彼は反ドレフュス派であっただろう」とまで言わせるほど憤慨させるものだった。応援に押し掛けられたレンヌ裁判所で、彼らは自分たちの運動に相応しい強い人間の登場を待っていたのだ。だが、ドレフュスの人格や、彼が「英雄」か否かということは、ドレフュス派の人々にとって、バレスの「ドレフュスが罪があるかないか」が大切なのではないのと同様、大切なことではな

かった。ドレフュス派の作家、シャルル・ペギーはドレフュス擁護に係わった時のことを『私たちの青春』(1913年)の中で、次のように書く。「真実への情熱、正義への情熱、不正義への苛立ち、嘘への堪え難さが、私たちの時間のすべてを占めていた、私たちの力のすべてを獲得していた¹⁶⁾」と。つまり、ドレフュス派にとって「ドレフュス事件」とは理念の実現を目指すための戦いだったのである。その理念とは1994年、ドレフュス事件から100年がたった記念の年に、社会学者のピエール・ブルデューが「正義と真実という人間に普遍的な価値を国や軍隊よりも上においた」と語る理念であった。ゾラはこの事件を単なるスパイ事件という枠組みから切り離し、フランス社会にひとつの改革をもたらすため、「知識人たちに、フランスで始めて市民社会 (la cité)における彼らの役割を示したのだった¹⁷⁾」。こうしてフランスの歴史に一つの理念を蒔き、それを学者の手に委ねて実現させること、それは「事件」から50年たったアルジェリア戦争下にあってもなお、問われ続けている一つの理念実現への運動となった。それは国境を越えた、従って国の利害を越えた私たちの良心の実現を目指す。この普遍的なモラルゆえにゾラはナショナリストたちの憎悪を集め、外国のジャーナリストから絶賛されたのだった。そしてこのゾラの開いた道は一つの伝統となって、1986年のバルビュの逮捕の際、裁判所におしかけた群衆の怒号の中で、このナチスのユダヤ人虐殺に荷担した元対独協力者の弁護を、どんな人間にも裁判を受ける権利がある、と引き受けた弁護士の姿勢の中にも窺える。例え、死刑をもってしか裁かれない犯罪にも、ルーマニアのチャウセスク大統領のように群衆のリンチで死ぬようなことはさせてはならないのだ。そしてこの理念がもっともはっきりとした形で見えるのは、ゾラの行動形態の奥に横たわっていた考えであろう。それは群衆に対する彼の姿勢から出ている。ここで数多く引用されているゾラの『私の憎しみ』の中の有名な一文を挙げておこう。「私はマネ氏を擁護した。それは私が人生の中でこれからも、攻撃されるだろう新鮮な(みずみずしい)個性に対して擁護し続けるということなのだ。私は常に打ち負かされた側につくだろう。飼い馴らされない気質を持った人間と群衆との間には、はっきりとした争いが存在している。私はこういった気質の人々の味方であり、群衆を攻撃するのだ。私は芸術の歴史全ては、気質だけが時代を支配することを証明するために存在しているのだということを主張しながら、罵ったのだ¹⁸⁾。

そして確かにゾラにとって群衆とは「どんな状況にあっても、彼らに訴えかけてはいけない。たった一人の人間に一丸となって襲っていく群衆の凶暴さを私は声を大にして非難する。例え、その人間がどんなに罪深かったとしても¹⁹⁾」といういわば一つの凶器に成りうる存在だったのだ。26才の時にこう宣言したゾラは、ルーゴン・マカールを書き終えた人生の秋になって、ある新聞のアンケートに次のように答える。

- フィクションの中で好みの人物は? 「英雄ではない人々」
- 最も軽蔑する性質は? 「裏切り」
- 最も賞賛する軍事的事柄は? 「訳も知らずに死んでいく兵卒」
- どのような死を望みますか? 「速やかに死ぬこと」²⁰⁾

この弱者に対する共感創作という空間の中に、例えば、あの『ルーゴン家の財産』の中、意味も分からず皆の後に着いて村を出てゆき、2月革命のクーデタで処刑されるまで自分に何が起こっているのか分からなかったプジャールのような人物を登場させる。ゾラの筆はこのような人物を1、2ページにさり気なく、主人公の人生の一瞬の経緯の傍らに置くだけだ。そこに作家自身の同情や非難が投影されることはない。だが、現実にはアンケートにこのように答えるゾラが、ドレフュス事件に関し、バレスの「やりがいのある人物だったら」という態度に嫌悪の気持ちを抱くのは当然だ。ゾラにとって大切なのは個々の人間の心理ではなく、置かれた状況だからだ。ゾラにとってドレフュスのモラルなど極端に言えばどうでもよかったのであり、罪の濡れ衣こそが、そして面子のためだけに不正な裁判を行う参謀本部とそれに荷担する政府が、そして何よりも反ユダヤ主義という形を取った群衆のリンチの中で、孤立無援のドレフュスの立場こそが戦わねばならない対象だったのである。この輪郭からゾラの小説を見てみる時、まずその副題の深い意図に改めて驚くであろう。

小説家ゾラ

さて、小説家としてのゾラの名声は国際的なものであったにも係わらず、彼の価値を単にドレフュス事件における役割にしか認めないような風潮が、彼の死後続いた。ゾラの埋葬式で弔辞を引き受けたアナトール・フランスは、反ドレフュス派の騒乱を恐れたゾラ夫人の、「ドレフュス事件について述べるのは遠慮してくれ」という頼みに対し、それなら弔辞を断る、と答えている。またゾラの遺骨がパンテオン寺院の廟に合祀と決まった時、国会議員であったモーリス・バレスは議会で「この件に関しては、この作家はそれほど価値がない。勝利の急進社会党の共和国が名誉を与えるのは、ジェルミナルの作者としてではなく、“私は糾弾する”の作者である」という意見を通した。小説家としてのゾラの復権が始まったのは、1950年代であり、その「自然主義」というレッテルの新しい解釈がなされて以来のことである。

一方ゾラの名前は長い間日本では、自然主義文学と結び付けられて知られており、またこの文学運動ができた当時より、英語からとはいえ、彼のルーゴン・マカール叢書すべてが日本に紹介されている。そして日本の自然主義文学の衰退とともに、ゾラの名前も消えていったようだ。今日でも出版の続けられているゾラの作品はほんの2、3冊にすぎない。そして日本の自然主義の汚名を未だに引きずっているように見える。すなわち、大衆小説、感情吐露のドロドロとした私小説等々。あるいはドレフュス事件に介入し、無実のユダヤ系将校を守った社会運動の輝かしい存在として記憶には残っているかも知れない。またこの「ドレフュス事件」のゾラでさえ、今日、ルカーチのフィルターを通したとしか思えないアンナ・ハーレントの次のようなヒステリックでお門違いの蔑みさえ伝えられてくる。「最後にこれら（事件の登場人物）すべての半ば滑稽で、半ば厭うべき営みの上に、素朴で感傷的な虚栄心に駆られたゾラの大がかりで修辭的な、しかし政治的には無内容な熱情が——自分に対する判決が下った夜、フランスから逃亡したことの釈明として、ロンドンへの逃亡という『犠牲』を払ってくれと自分に哀願するドレフュスの声を聞いたのだという、彼のあの偉そうな嘘が加わったのだ²¹⁾」これではハーレントがバレスと同様、何かゾラに個人的で感情的な恨みを抱いているかのようである。

確かにゾラの事件介入に関しては様々なことが言われてきた。例えば、『三つの都市』を書き終えたところで暇があったからだとか、他の事件への署名は拒んでいるから単なるその場限りの日和見主義者だとか。もともと政治に疎く、その名声と人の良さを利用され担ぎ出されたのだとか、あるいは逆に売名行為だとか。これらの不当な評価は、ゾラの小説の作法を知らず、単に自分たちの社会の日常生活を投影したことから出てきた感想に過ぎないように思われる。

ここで再びルーゴン・マカール叢書の副題、『第2帝政下の一家族の博物史及び社会史』(Histoire naturelle et sociale d'une famille sous le seconde empire)に戻ってみよう。つまりこの副題は、小説の枠というものが歴史及び社会で限定されており、また人間というものが生物の歴史的な展開の中で捕らえられているということを告げているのだ。この学問的な(それゆえ、ゾラは“実験的小説”とも呼ぶのである)枠組みを無視すると、例えばこのシリーズの『大地』に浴びせられた大非難や、『居酒屋』に対する次のヴィクトール・ユーゴーのような批判が可能になるだろう。「この本は悪い。貧乏人の、そうならざるを得ないような悲惨や卑劣さから由来する醜惡な傷をまるで楽しみのように見せている。それが本当だとか、世の中そんな風だとか私に言わないで貰いたい。私だってそれを知っている、あらゆる悲惨さの中に降りていったのだから。しかし、私はそういったものを見世物として出さない。不幸をむき出しにして見せる権利などない。私は恐れずに『レ・ミゼラブル』(悲惨な人々)の苦痛や恥じの気持ちを見せた。私は登場人物として囚人や娼婦を取り上げた。だが私は彼らを卑劣さから引き上げてやろうというたゆみない考えからこの本を書いたのだ……私は彼らの気持ちをやわらげ、癒そうとこれらの悲惨さの中に侵入していった。そこに私はモラリストとして、医者として入っていったのだ。しかし私はそういった場所に人々が無関心さや面白半分で入って行くのは望まない。誰にもそんな権利はない²²⁾」と。このユーゴーの理屈はラヌーも指摘しているように、ゾラの「ルーゴン・マカール」叢書が『パスカル先生』で閉じられているのを見れば公平ではない。だがそれ以上に、ゾラの登場人物たちはユーゴーのような「あるべき姿」で描かれているのではなく、常に社会や歴史の制約の中で生きているということ、そしてゾラの理念は、作者の“モラル”や“癒し”の意図によって方向づけられる登場人物の動きの中には存在していないということを知るべきなのだ。だが、ゾラは自分の作品に現れる歴史や社会が固定されたものだ、と語っているだろうか？ シリーズの冒頭に来る『ルーゴン家の財産』は、墓の叙述から始まる。そしてそれが繰り広げるのは、過去への感情的な時の蘇りではない。

La terre, que l'on gorgeait de cadavres depuis plus d'un siecle, suait la mort, et l'on avait du ouvrir un nouveau champ de sepultures a l'autre bout de la ville. Abandonne, l'ancien cimetiere s'etait epure a chaque printemps, en se couvrant d'une vegetation noire et drue. Ce sol gras, dans lequel les fossoyeurs ne pouvaient plus donner un coup de beche sans arracher quelque lambeau humain, eut une fertilite formidable. De la route, apres les pluies de mai et les soleils de juin, on apercevait les pointes des herbes qui debordaient les murs; en dedans, c'etait une mer d'un vert sombre, profonde, piquee de fleurs larges, d'un eclat singulier. On sentait en dessous, dans l'ombre des tiges pressees, le terreau humide qui bouillait et suintait la seve.²³⁾

100年以上に渡って屍を呑み込んでいた土は死の臭いを発散し、人々は町の反対側に新しい墓地を作らねばならなくなった。古い墓地は、放っておかれ、毎年春が来るたびに浄化され、黒々と密生した植生で覆われた。墓掘り人夫がシャベルで掘るたびに死骸の端くれを提出せずにはならなくなった、このべとついた土は素晴らしい豊穡さを宿していた。5月の雨や6月の太陽の後、道からは、塀を越えて伸びている草の先端が見えるのだった。塀の内側では奇妙な輝きをもった大柄な花をつけた濃く深い青葉の海が広がっていた。下の方、薺めく茎の影の中では、樹液を醗酵させ発散させる湿った腐植土の匂いがした。

このように、物質に還元された人間が土や太陽、雨などの自然と混じり合い、溶けて生命の豊穡さの手助けをしているかの如くに描かれている。そしてこれら人間の屍体や墓場は、手押し車に積まれてプラッサンの町を突っ切って移動し、従って皆の目に触れ、あちこちに零れ落ち、醗酵し、草を茂らせ、梨に大きな実をならせ、ボヘミアンに宿を提供し、とりわけ子供たちの格好の遊び場となる場所として描かれている。勿論、この“昔”の墓場で愛の出会いを繰り返す若いシルヴェールとミエットは小説の歴史の中では2月革命のクーデタで死ぬ運命を担われる。だが、彼らの死はあくまで永続する生の精気の瞬時の出来事なのだ。しかも、例え瞬間を生き、屍となって墓に入れられても、彼らの歴史は隠されることはない。あるいはまたどこかの場所に移動し、別の生命を育むのだ。この“混ざる”“醗酵する”という発話を、生命体から、人間社会に当てはめるならば、そこにゾラの愛読した歴史家、ジュール・ミシュレの影響をいかほど見ることができよう。ミシュレは『Le peuple』の中に書く。

「今日、人民の上昇をしばしば野蛮人の侵入に例える。この野蛮人という言葉は気に入った。私はこれを受け入れよう……そうだと。つまり、新鮮で生き生きとした若返りの精気なのだ。野蛮人、つまり未来のローマに向かって進行中の旅行者なのだ。恐らくゆっくりではあろう。世代を越えて少しずつ、死の中で一休みしながら、だが、別の者がそれを続けないわけではない。(……) この大地は人間の汗を飲むことを、その熱気と生き生きとした効力で刻印されることを求めているのだ。私たちの野蛮人は大地にこれら全てを与える。大地は彼らを愛しているのだ。野蛮人は無限に、そして過度に愛する。時にはアルベール・デューラーのような聖なる不器用さやジャン・ジャックのような度の外れた礼儀正しさ——彼には技巧が見え隠れする——に至るディテールに流れてしまうこともあろう。こういった念入りなディテールで野蛮人たちは全体を巻き添えにしてしまう。彼らを非難し過ぎてはいけない。それは過剰な意志や汨濫する愛、そして時には精気の豪華さから来ているのだ。この精気というのは、方向を間違えると、自分を苛み、傷つける。精気は一度に、葉や、実、花という全てを与えたいと欲しているのだ。それは身を屈め、枝枝をよじ曲げる²⁴⁾。

このミシュレの描く私たちの中に住む「野蛮人」、それは“方向を間違える”と群集と化し、自らを傷つけるだろう。だが、そのエネルギーは限りない。そしてこのエネルギーを携えた人が貴人なのだ。「大革命は貴族の身分を削除したと言われている。とんでもない、反対だ。革命は3千4百万もの貴族身分を作り上げた……亡命者は自分の祖先の栄華を指し示す。戦に勝った農民は答える。「私が祖先なのだ!」²⁵⁾」と。彼らは「祖先」(ancêtre)の持つ歴史の新鮮さを

宿しているからだ（このミシュレの“祖先”はゾラにあって“起源（origine）となるだろう）。そして例え，“死”という中断があったとしても、人類はこのように身分が入れ替わり、従って社会のすべての要素が混ざり合い、時の中で土を耕し、醗酵して新しくなった自然の中に生を続行するだろう。このように考えるミシュレにとって最も軽蔑すべきはブルジュワに代表される動きを止めた人々だった。このミシュレの人間観はそのままゾラの登場人物たちの中に移住しているようだ。そしてミシュレが理想とした“天賦の才”に恵まれ、“創造や生成の力”を持つ人間の資質とは、精神の2つの性質と呼ばれているもの、すなわち素朴な人々の本能（l'instinct des simples）と賢人の考え深さ（la réflexion des sages）の結合であった²⁶⁾。

この賢人の方をゾラは『パスカル先生』を除いてあまり小説に描かなかった。この点、ある意味ではラヌーの次のような表現は当たっていると言えよう。「ルーゴン・マカルル、第2帝政下の一家族の自然及び社会史の第一の機動力は遺伝ではない。そうではなくて、力への意志だ。その意志はバルザックのように主人公たちのものではなく、作者自身のものなのだ。ゾラはゾラでありたかったのだ²⁷⁾」。ドレフュス事件のゾラもこのコンテキストの中で考えると、彼はそこで自分の世代が課した歴史を生きたということであろう。紙幅の関係上、その裁判に纏わる件は述べられないが、その係わりは正にミシュレの“賢人”から出発したものであろう。あの「私は糾弾する」は、自分を告訴させることを計算し、その後を生じることを綿密に計算して発表されたものだった²⁸⁾。つまり、自分が告訴されることにより、裁判をドレフュスを裁いた非公開の軍事裁判から公開の刑事裁判にもっていき、ドレフュスの有罪を決定している証拠が全く意味をなさないことを示そうとしたのだ。軍事法廷で裁かれたドレフュスの有罪を公開の刑事法廷でやり直させ、こうしてレゾン・デタ（国家的理由）の犠牲者に「市民の権利」を戻させようとしたのだ。

アンケートで望んだように、死はゾラの命を速やかに奪っていった。それは正に群集に逆らって大声を上げた人間の、群集による死だった。ドレフュス再審決定に怒号し、“負けた”ことに暴徒と化した群集を懸念して、警察は「事故死」と発表、生反可な調査しかやらなかったという。

注

- 1) Armand Lanoux, *Bonjour Monsieur Zola*, AMIOT-DUMONT, Paris, 1954, p.383
- 2) ドレフュス派の「知識人」に対抗して、コペー、ブルヌチエールらの文人や大学教授、作家らが1898年12月に設立したもの
- 3) Jean-Denis Bredin, *L'AFFAIRE*, Julliard, 1993, p.262
- 4) Georges Bourdin, *La Troisième République*, col. Armand Colin, 1956, p.123
- 5) *ibid*, p.69
- 6) Christophe Charle, *Naissance des "Intellectuels"*, Les Editions du minuit, 1990
- 7) *ibid*, p.170
- 8) *ibid*, pp.35-36
- 9) Armand Lanoux, *Bonjour Monsieur Zola*, *op. cit.*, p.280
- 10) “Je n'ai pas assisté à la dégradation publique, mais le récit m'en est parvenu, et mon émoi, au point de vue humain : tous contre un, qui crie son innocence, la ferocité de la foule” (*Vérité*,

- La librairie Générale Française, 1995, p.669)
- 11) "Je ne peux pas me passionner pour l'innocence d'un être dénué de grandeur" (cite par Lanoux, *Bonjour Monsieur Zola*, op. cit., p.293)
 - 12) cite par Jean-Denis Bredin, *L'AFFAIRE*, op. cit.
 - 13) Emile Zola, *M. Scheurer Kestner*, l'article dans Le Figaro, 25 novembre, 1897
 - 14) cité par Lanoux, *Bonjour Monsieur Zola*, op. cit., p.291
 - 15) cité par Lanoux, *Bonjour Monsieur Zola*, op. cit., p.292
 - 16) Charles Péguy, *Notre jeunesse*
 - 17) Jean-Denis Bredin, *L'AFFAIRE*, op. cit., p.265
 - 18) Emile Zola, *Mes Haines*, Paris, Fasquelle, 1922, pp.322-323 "J'ai défendu M. Manet, comme je défendrai dans ma vie toute indivisibilité franche qui sera attaquée. Je serai toujours du parti des vaincus. Il y a une lutte évidente entre les tempéraments indomptables et la foule. Je suis pour les tempéraments et j'attaque la foule. J'ai blasphémé en affirmant que toute l'histoire artistique est là pour prouver que les tempéraments seuls dominent les âges... (*Mes haines*, 1866, なお、日本語文のイタリックは筆者)
 - 19) Lanoux, *Bonjour Monsieur Zola*, op. cit., p.228
 - 20) *Ibid.*
 - 21) 河上源太郎, 『ソレルのドレフュス事件』, 河上中公新書, 1996, p.76 引用)
 - 22) cité par Lanoux, *Bonjour Monsieur Zola*, op. cit., p.140
 - 23) Émile Zola, *La fortune de Rougon*, Paris, Fasquelle, 1985, pp. 17-18
 - 24) Souvent aujourd'hui l'on compare l'ascension du peuple, son progrès, à l'invasion des *Barbares!* Les mots me plaît, je l'accepte... *Barbares!* Oui, c'est-à-dire pleins d'une sève nouvelle, vivante et rajeunissante, *Barbares*, c'est-à-dire voyageurs, en marche vers la Rome de l'avenir, allant lentement, sans doute, chaque génération avançant un peu, faisant halte dans la mort, mais d'autre n'en continuent pas moins.(...) Elle demande, cette terre, à boire la sueur de l'homme, à s'empreindre de sa chaleur et de sa vertu vivante. Nos barbares lui prodiguent tout cela, elle les aime. Eux, ils aiment infiniment, et trop, se donnant parfois au détail, avec la sainte gaucherie d'Albert Durer, ou le poli excessif de Jean-Jacques, qui ne cache pas assez l'art; par ce détail minutieux ils compromettent l'ensemble. Il ne faut pas trop les blâmer; c'est l'excès de la volonté, la surabondance d'amour, parfois le luxe de sève; cette sève, mal dirigée, tourmanetée, se fait tort à elle-même, elle veut tout donner à la fois, les feuilles, les fruits et les fleurs, elle courbe et tord les rameaux. (Jules Michelet, *Le Peuple*, Flammarion, 1974, p.72)
 - 25) *ibid.*, p. 88
 - 26) *ibid.*, p. 187
 - 27) Le moteur premier des Rougon-Macquart, histoire naturelle et sociale d'une famille sous le Second Empire, n'est pas l'hérédité, mais la volonté du puissant; oh! pas celle des héros, comme chez Balzac, mais bien celle de l'auteur. Zola voulait être Zola. (Lanoux, *Bonjour Monsieur Zola*, op. cit., pp.101-102)
 - 28) Emile Zola, *Verite*, Librairie Général Française, 1995, p.670